

信州読書会 ツイキャス読書会

課題図書 カズオ・イシグロ 『わたしたちが孤児だったころ』

信州読書会では、毎週、ツイキャスをつかった視聴者参加型の読書会を開催しています。

信州読書会のメルマガ登録者は、課題図書の読書感想文を 800 字で書いていただければ、放送中に紹介します。

(募集要項はメルマガでお伝えします)

また作品に関する質問・感想などは、どなた様も、放送中ツイートいただければ、とりあげます

信州読書会 ツイキャス <http://twitcasting.tv/skypebookclub>

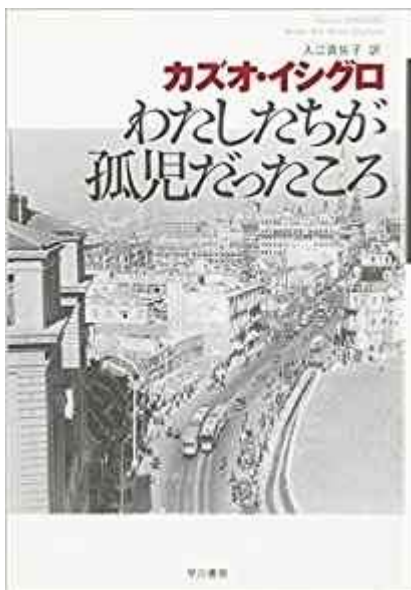
『信州読書会』メルマガ登録はこちらから http://bookclub.tokyo/?page_id=714

今後のツイキャス読書会の予定です。 http://bookclub.tokyo/?page_id=2343

『ツイキャス読書会』音声のバックナンバーです。

<https://www.youtube.com/playlist?list=PLVj9jYKvinCsgP7jtFgzqxea6cgqd7mrf>

(各回の感想文は動画の下の説明欄に PDF へのリンクを張っております。)



第 67 回のツイキャス読書会の課題図書は、カズオ・イシグロ 『わたしたちが孤児だったころ』です。

読書感想文を提出して下さった皆さんありがとうございます。

『私たちが孤児だったころ 始めのところ』

読み初めてすぐ、難しい…という感じでなかなか内容が頭に入ってこなかったのですが、共感できる場所もあったので書いてみました。

ミス・サラ・ヘミングズは最初、バンクスの事を眼中にないというような態度だったけど、探偵として名も売れはじめた頃メレディス基金の晩餐会と一緒に連れて行ってもらうために必死で説得していて、結局彼女の腕を振りほどいて置いてきてしまった事を少し後悔していて私も同じような所があるかもしれないなと思いました。

ズル賢い人はなんとなくすぐ分かってしまうからなんとなく避けてしまうのですが、でも自分は意地悪なのかもしれない、少し優しさが足りなかったのかもしれないなと反省する事が時々あります。

みんなに優しく出来れば一番良いのですが、後々の事を考えたり、自分のなかで納得できなかったり、でもなんか心の中がモヤモヤする気持ち、バンクスも同じなのかなと思いました。

少し分からなかったのは、サラが晩餐会から帰る時、エスコートしてあげれば良かったのかな？ と少し迷う所があるのですが、それはあんまり関わりたくないという気持ちなのか、それとも別の気持ちなのかが読み取れませんでした。

バンクスの気持ちを読み取るのがとくにすごく難しいなと思いました。

友達のオズボーンに学校での変り者って言われた事が、尋問されたと言われた事より『少々腹が立った』と言って、どういう事なのかなと思いました。

全部読まれた方もいらっしゃるので、色々教えていただきながら読書会を楽しみにしたいと思います。

せっかく本を買ったので難しいですが最後まで頑張って読みたいと思います。

2018年2月23日 143Pまで

(おわり)

「孤児への想い」

主人公のように、私も虫眼鏡を愛用している。但し用途が違う。私の場合は老眼用である。笑。

主人公であるバンクスは、10歳の時失踪した両親を探すため探偵になったが、真相は想像とかけ離れたものだった。

話は推理仕立てで勤められ、私は、その面白さに途中で租地や侵略という当時の状況に矛盾と腹立たしさを感じながらも、500ページに渡る長文を比較的短時間に最後まで読み通すことができた。

読後、イングロ氏から私の頭にこんなメールが送られてきた。

「過去に起きたできごとを現在の視点で解き明かすことは容易ではない。今の虫眼鏡(今の見方や尺度)で過去を見ても真実は分からない。しかし、過去に私も似た経験をしているように、上海が過って租地であり、彼の地が侵略者により罪のない住民が被害を受け、孤児が出来たことや、身を守るために故郷を捨てざるえなかったある意味孤児と呼べる人達がいたことは、紛れもない事実なのだ！」

私は、返信として、自分の心にメールを送った。

「私は今、租地や祖国の言葉さえ知らなかったことや、日本を含めて過去の侵略についても知識がほとんどないことを恥ずかしく思っています。今日からもっと侵略行為や難民問題に関心を持ったり、国内で祖国を離れて働いている方達や以前から日本にみえる在日外国人の方達、福島から避難してみえる人達、いろいろな事情で故郷に帰れないでいる人達に、私ができるささやかなことを考えてみます。」と。

(おわり)

わたしは誰に騙されたのだろう

最初から予感があった。

だけれど読まなくちゃ、と喉の奥に何かがつつかえながら読んでいた。さまざまな疑問を抱えながら、これはミステリーなんだと自分に言い聞かせて、謎が解けるのを辛抱強く待っていた。

パフィン、フィリップおじさんに騙された。

わたしは、カズオ・イングロはノーベル賞作家だからきっと面白いはずだと思っていた。

期待はあっけなく裏切られ、哀しい読後感が残った。わたしはカズオ・イングロに騙されたのか。

中国人は平気で人を騙す。

日本人も悪い人間ばかり。

イギリス人でさえ主人公の気持ちを理解できている人は出てこなかった。

これは 1930 年台の上海租界が舞台だから、攻め入る日本軍や中国国内の政治的な混乱の中、人の気持ちも逼迫した状況なのが当たり前かもしれない。本文中にフィリップおじさんは「人種的プライド」に訴えて自分の保身に利用したとあった。けれどここに流れるそこはかとない良心の欠如は人種のせいではないと思う。

人を信じたために傷つくパフィンに誰も寄り添えない。なぜアキラとあの場所で再会させ、なぜ母親と会話さえできないくらいに会いにゆくのが遅くなったのだろう。これでは救いがない。

小説家は人を騙す仕事だからと、ある作家は言っていた。フィクションの世界なので、表現は自由だ。作家の描く世界に入って登場人物の気持ちを追体験するのは大方楽しい。なのに今の気分としては人間不信になりそう。騙されたとしたら「きっと」を期待した自分のせい。または現時点での自分の理解が及んでいないせい。

課題図書の中で、読み終えて人にあげた本はあったけど、捨ててもいいと思った本ははじめて。

この本はうちの本棚にずっとは並んでいないと思う。その当初の予感は当たるだろう。きっと。

(おわり)

「記憶の中の確かなもの」

私にとってカズオ・イングロの小説は「日の名残り」に続く2回目の読書体験となった。

「日の名残り」では主人公の執事スティーブンスがあまりにも生真面目すぎて、かえってそれが側から見ていてどこか滑稽でつい笑ってしまった。

そしてこの小説の名探偵クリストファーも、意識して感情を抑制し冷静さを保とうとする姿はどこか面白くて心がなごんだ。

二つの小説を読んでカズオ・イングロ作品に共通する静かなユーモアを感じた。

しかし物語はとても残酷だった。

(引用始め)

「到着したときからわたしが大きな衝撃を受けていたのは、責任の否認、一種思いあがった自己保身の中で自らを誇示している人々に私は何度も遭遇した。上海のエリートだというのに、運河を隔てたところで隣人の中国人が戦禍にあっているのを蔑みの目で見ているのだ。」 P273

(引用おわり)

この一文に物語の全てが凝縮されていると思った。それらは出来る事なら知りたくないことだった。私達が子どもの頃に読んだ正義が勝つ物語。それはクリストファーが、そしてサラが信じて探していた未来だ。

だがそれは全て偽りで道徳心や正義感なんて無力なのだ、暴利をむさぼり人種差別を平気で行う、人間なんてそんなもんだ、目を覚まして現実をよく見なさいと、無理やり物語は私達にうったえかけている。

鬱鬱とした私の心は、クリストファーの母親の気高い正義感が結局家族をバラバラにしたのではないかという思いに囚われてさらに自分をおいこんで不安になっていった。

そして救いを求めて私はどんどん読み進めていく。

しかし期待はむなしく、最後フィリップおじさんから明かされる母親が消えた真相はさらに悲惨で許しがたい出来事だった。私は女性であるがゆえに起こった蔑みに怒りを感じた。

クリストファーの母は、過去にかかげた正義や道徳心のためでなく最後はひたすら愛する息子を守り抜く事だけを思っ
てワン・クーに屈する。

消え行く記憶を辿る不確かなこの回想物語の中で彼女の息子を思う愛だけはゆるぎない真実として私の心のなかに残っている。

(おわり)

『ノス・タル・ジック』

クリストファーはいったい何を求めて生きていたのだろうか。

両親の疾走を突き止めるという自分に課した命題だろうか。

ブランコに乗って子どものようにはしゃぐ母、あるいはアキラとバラエティーに富んだ探偵ごっこを延々として過ごした少年時代の「刹那」を巻き戻すことか。

ジェニファーに対して責任を持った大人として生きていくことか。

「重荷」から解放されサラ・ヘミングスとマカオで新しい日々を開拓することか。

追い求めているものは、たくさんあった。けれど、自分がこれまで抱いてきた切なるものは、思いもよらない事実が明かされることで吹き飛んでしまう。私の目の前に「いまここにあるもの」、足元を固めていると思っていた生業、それらすべてはワン・クーと“イエロースネーク”フィリップ叔父さんとの「経済的取り決め」が大元にあったのだ。そこに注がれた母の心の血は、あまりにも生々しい。

クリストファーが追い求めていたものは、まるで上海租界の空間、特別に守られた空間の中に佇む単なる「ノス・タル・ジック」。戦場で遭遇した血まみれの「アキラ」がそれを教えてくれたのだ。

自分の足場は、何に拠っているのか。

そのことを、もしかしたら永遠に知らずに死んでいく人もいるのかも知れない。

実は、何も知らないのかも知れないし、自分の認識で8割がた正しい場合もあるかも知れない。この小説は、人が見つけている「自分の人生」のおおかたが主観で成り立っているということを言いたいのかも知れない。アイデンティティーなんて陳腐なものだ、そんな気持ちにさえなってしまう。

私を成り立たせている私は何か。それを真面目に考えるのなら自分のヒストリーを辿ることはとても重要なことなのかもしれない。自分のルーツ。GWIに帰省したら、両親に聞き取り調査でもしようか。どうかな？ それもちよっと怖いな…。そんな読後感だった。

(おわり)

belouga さんのブログです。過去のコラムなども掲載されています。ぜひご覧ください。

『belouga のつれづれ』 <http://ameblo.jp/clearmandarin/>

『魔法の国』

子供の頃、「魔法の国」や「お菓子の国」が本当に存在すればいいのにと思っていた。ただ同時に、頭のどこかで「そんな訳ない」と子供ながらに理解していた。

しかし、この小説を読んで、目が覚めるような想いとらわれた。なぜなら、「魔法の国」が実在していたと思知らされたからだ。

この小説の語り手のクリストファーは、10歳の頃、両親の失踪により孤児になる。その後、両親の行方を探す目的を秘めながら探偵となる。彼が後に引き取るリアル孤児のジェニファーと違い、両親への想いは絶えることはない。ジェニファーは自らのトランクが紛失した際も、諦める術を身につけていた。しかし、クリストファーはトランクは大事な物だからと説くが、それは両親への断ち切れない自らの想いだったのだろう。

両親を事故で亡くしているジェニファーにとって、現状を受け入れて前に進むしかない。同じ孤児という境遇にあっても、生き方はまるで違う。

クリストファーは、子供時代は本当に素晴らしかったと回想する。それは、両親の作り上げたクリストファーのための「魔法の国」だった。現実には、上海の租界という環境を舞台に、戦争やアヘンを絡めたきな臭い時代背景に呑み込まれようとしていた。

両親の失踪の真相も、フィリップをはじめとする大人たちの真実も、身近に迫っていた戦火もすべて「現実」だ。現実はいつだって非情だ。だからこそ、親は子供のために「魔法の国」をつくる。すべての真実を乗り越えて、クリストファーが母親に会いにいった際、息子に気づかなかったのは、痴呆のためではないかもしれない。親子の対面をしてしまうと、クリストファーに負担や今までの真実を強いてしまうのがわかっていたのだろう。年老いてさえ、まだ息子に「魔法の国」を作ってあげたかったのだと信じていたい。

アキラも自らが日本を裏切ったとしても、五歳の息子に「父親はお国のために死んだのだ」と伝えてくれという。アキラも息子には「魔法の国」をみせてあげたかったのだ。

クリストファーの母もひどい境遇にあっても、息子のために命を絶たなかった。ずっと母に見守られていた。クリストファーは本当の意味での「孤児」ではなかったのかもしれない。

私自身は両親は健在だが、18歳から離れているゆえ、ふだんはほとんど意識していない。意識せずに生活ができているということは、私の両親も「魔法の国」に住まわせてくれていたのだろう。自分が大人になって、「魔法の国」の外に出たからこそわかる。少し、涙が出た。

(おわり)

岡山読書会のブログです。過去のコラムなども掲載されています。ぜひご覧ください。

<http://ameblo.jp/kaoru8913/>

スカイプで個別読書を主催されています。ご興味ある方はブログからお問い合わせください。

ツイキャスのチャンネルはこちら <https://twitcasting.tv/yuuki27144>

「目覚めない悪夢」

主人公のクリストファー・バンクスは、失踪した両親が監禁されていたと思われる家の住所を探し当てる。その家は、戦場の最前線にあり、カフカの『城』のように、なかなかたどり着けない。たどりつくと、死んだ犬と、首から血を流した少女がいた。

この本を読んで、眠った昨晚、私も同じような夢を見た。以前住んでいた街の駅まわりをぐるぐるまわって、街の一番大きな公園を探す。そこでは、テニスの大会があり、自分の出場する予定の試合の時間が近づいている。しかし、公園にたどり着かないうちに、テレビで観たことのある俳優のマンションに案内され、寝室に招かれると、高校時代の同級生の女の子がベッドで寝ていて、寝ぼけまなこで迎えてくれた。彼女とは高校卒業以来一度もあっていない。それから、洗面所を借りて、具合が悪くなったので吐くと、喉から笹飴みたいなものがいつまでも流れ出すという悪夢だった。

この作品の後半も悪夢だった。どこか既視感のある悪夢がつづく。母は、軍閥の奴隷にされていた。叔父は裏切り者だった。上海の支配階級は腐敗していて、戦争で私腹を肥やしている。民衆は阿片中毒であり、サラの結婚相手の上院議員もギャンブル中毒だ。中共、国民政府と日本軍が戦争していて、泥沼である。

孤児たちは、自分がどうして孤児なのかわからないまま世界に投げ出されている。記憶は捏造され、悪は、隠蔽される。

疑いだせば、この世の中は、悪意によって成り立っているのではないかという不安に襲われる。戦争の正義は仕組まれたものであり、庶民は、一片の肉や、一滴の血になるまで搾り取られる。自分が、裁かれないうためには、自分も末人となって、裁くのをやめなければならない。クリストファーの母のように道徳的であろうとすれば、ジョージ・オーウェルの『1984年』の愛情省 101号室のような場所で、拷問を受けて、自分の尊厳と信念までズタズタにさせられ、やがて廃人にされる。

良心の自由が、脅威にさらされている。つぎは自分の番ではないか、という目覚めない悪夢。

(おわり)

『信州読書会』メルマガ登録はこちらから http://bookclub.tokyo/?page_id=714
今後のツイキャス読書会の予定です。 http://bookclub.tokyo/?page_id=2343